

Stand Up With Drone

ドローン技術を用いて
災害が起こったその時に、迅速な救助や支援物資の提供が
できるようにしたい

① 災害時のスマートフォン用緊急連絡アプリケーション開発

- ・ 緊急速報が来ると画面が切り替わり、災害モードに移行する。
- ・ 災害モードでは、安全 物資不足 要救助の3つのボタンが表示され、ユーザーは自分の状況に適したものを選択する。
- ・ 選択すると事前に連絡先に登録している家族や友人と状況に応じて消防や役所、避難所に連絡が行く。
- ・ 要救助を選択した場合、即座に消防に救助要請が行く
- ・ 道が悪い場所でもドローンによる見回りが行われる



② 避難所ごとのほしいものリスト作成

- ・ 誰もがリアルタイムで参照、編集、追加可能であり、これによって過不足ない物資提供が実現する。
- ・ フードデリバリーサービスと連携し、避難所に食事を提供する。
陸路での輸送が困難な場所には、ドローンを用いて食事を届ける。



③ ドローン操縦講座の開催

- ・ ドローン操縦の講習を、地域住民を対象に行う。
- ・ 講座は複数用意し、満身に操作できるよう継続的にドローン操縦を学ぶ講座、実際に災害の現場に立った際に指揮が取れるよう技能知識共に深く身に付け、資格取得を見据えた講座など柔軟に対応する。
- ・ 最終的には地区にドローン操縦の資格を持ち現場の指揮ができる人を10名以上、指示によってドローン操縦が可能である人が30名以上になることを目指す。
- ・ 新たなスキルを取得することにより、仕事の幅が広がり、更なるウェルビーイングに繋がる



提案動機

人の移動が難しい場所での撮影や、無人機のため危険な場所にも入ることが出来るドローンは、人間が不可能なことを代わりに行ってくれるため、今後も災害時などで大いに役立つ。
東日本大震災から10年が経つ今年、今回のCOGのプロジェクトを通し、改めて防災について見直す機会になると考えた。

対象地域：横浜市
テーマ：長期に亘るコロナ禍において
横浜市民一人ひとりのウェルビーイングを実現する。
チーム名：フェリス女学院大学災害対策研究会
メンバー：木村仁美、小柳海音、日向映理子、森下純、米屋美雪

実行までのプロセス

- 2022年1月～ 緑園リビングラボが主体となり、緑園都市の地域住民を対象としたドローン講座の打ち合わせを開始する
- 2022年4月 第一回ドローン操縦講座を実施する
- 2022年5月 第一回ドローン操縦講座の結果をもとにフィードバックを行う
- 2022年6月～ スマートフォン用緊急連絡アプリケーションの開発
継続したドローン操縦講座の開催
- 2023年4月～ ドローン講座受講者のコミュニティを作成
コミュニティが主体となってドローン講座を実施する形態に移行